

平成27年度中学校武道授業(相撲)指導法研究事業



第2回全国研修会(11月開催)の検討を行う

平成27年度中学校武道授業(相撲)指導法研究事業〔主催＝(公財)日本武道館・(公財)日本相撲連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省〕が、平成27年1月16日～17日の2日間、日本武道館大会議室において研究者7名、日本相撲連盟事務局1名、日本武道館事務局3名で実施された。11月に開催された『第2回全国相撲指導者研修会』の課題と、今後の方向性についての検討協議が行われた。

■1日目(1月16日)



安井和男 常務理事

『相撲は日本人が考え出した競技である』ということ念頭に置き、相撲の素晴らしさを伝えていただきたく、益々のご協力をお願いしたいと考えております。今後も相撲の精神を持って青少年の健全育成に尽力していきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が「相撲の授業内容を充実させるという事が本研

究事業の目的であります。現在、中学校の武道授業は柔道と剣道を中心に進められておりますが、内容については中学生が満足していないところがあります。武道が中学校で必修化されて5年目を迎え、これからは内容の充実がより求められる時期であると考えております。

究事業の目的であります。現在、中学校の武道授業は柔道と剣道を中心に進められておりますが、内容については中学生が満足していないところがあります。武道が中学校で必修化されて5年目を迎え、これからは内容の充実がより求められる時期であると考えております。



三藤芳生 理事・事務局長

私の経験上、相撲には二つの良い点があると思います。一つはお互いの『力比べができる楽しさ』があるところです。自我が発達する中学生にとって、力比べができるという事は非常に楽しみな部分であると思います。もう一つは『遊びの要素がある』という事です。勝っても負けても深く傷つかず、たとえ負けても次は勝とうと思えるという相撲の歴史の中で育まれた良さがあります。

相撲はまさに何も足さず、何も引かず、裸で勝負をするので、学ぶ事が多い種目です。体力強化という点においては、他の種目と比べても非常に強い部分であり、その中で相撲の教えを身につけることができます。また、それとともに勝負の中で『相手への思いやり』という教育的要素をどのように実践していくか、という事が重要になると思います。以上のような観点から、相撲は今後まだまだ伸びていく余地があると考えています。実りある研究事業となりますよう期待いたします」と主催者挨拶をした。

開講式終了後、記念撮影を行い、検討協議に入った。まず、昨年11月に実施された第2回全国相撲指導者研修会の実施内容を、満留久摩研究者が用意した報告書の原稿を基に各研究者が確認した。確認作業終了後、いったん文章で打ち出し、全員で内容を精査した。

続いて、中学生の協力を得て行われた指導実践について、いかに中学生にわかりやすく相撲を指導するかが検討された。満留研究者を中心に、各研究者が活発に意見交換を行った。

また、来年度実施予定である『第3回全国相撲指導者研修会』の参加者の募集方法についても検討がなされた。安藤均研究者からは「日本相撲連盟のホームページに研修会の要項を掲載してみても」との提案があった。

その後、報告書に掲載する写真の選定を行い、初日は終了した。



意見交換の様子

■2日目（1月17日）

この日は、まず廣瀬理奈研究者が現在勤務している富士吉田市立下吉田中学校での実践例をスクリーンに写し、映像で紹介した。「私の勤務している中学校は柔道が盛んな地域にあるが、あえて相撲を授業で行っています。授業をしていく中で他の先生方の理解を得ることもでき、大変良い評価をいただいています。1年目は『押し』に重点を置いて指導をしてきましたが、2年目になると相撲の授業に対する生徒の欲求が多様化してきました。よって、生徒の欲求を充足し、楽しさを実感しながら技術習得できる授業を展開するため、新たな技の導入を中心に進めました。具体的には、基本となる『押し』を大事にしながら、『寄り』の学習を生徒の気づきを大事にしながら進めました。特にまわしの持ち方や組み方を工夫したり、相手の体勢をどのように崩すかの言葉かけを意識して行うようにしました。

また、指導要領に即した内容である事の重要性を考えると、段階的に変化していく生徒の欲求を吸い上げた授業を作り上げていくため、以下の4点に重点を置いて2年目は授業を進めました。

- ①全ての動作や活動に相撲の特性を取り入れる。
- ②『押し』という基本となる技で、相手のバランスを崩す事を意識させる。併せて新しい技の習得に繋げていく。

- ③生徒の気づきを大切にした課題解決を、授業の中で展開していく。
- ④生徒への気づきを与える言葉かけを大事にした授業をする。



廣瀬研究者の実践例報告

どんな競技でも授業を進めていくと迷いや不安が出てきます。しかし、そのような時こそ、その競技の特性や魅力は何か、生徒の興味・関心はどこにあるのか、をあらゆる方法で捉えることが大切であると思います。また、生徒の気づきを大切にし、相撲の素晴らしさを教え、伝えていきたいと考えています」との報告があった。

その後の感想並びに質疑応答では『寄り』を教えた事により攻防の膠着が少なくなったのでは「仕切りは危険なのは」「勝てない生徒のモチベーションを保つには」「評価の仕方はどのようにしているのか」等、様々な質問、意見が出た。

午後からは来年度実施予定の『第3回全国相撲指導者研修会』『平成28年度中学校武道授業(相撲)指導法研究事業』の日程、場所、内容等の確認が行われた。その後、各研究者から一言ずつ本研究事業の感想が述べられた。

閉講式では、研究者を代表し、安井氏が「日本相撲連盟へ持ち帰り、本研究事業で協議された内容をなるべく多くの人にわかりやすく発信していきたいと考えております。より一層のご協力をよろしくお願いいたします」と述べた。続いて三藤理事・事務局長が「相撲は体力をつけながら心技体、一体となって勉強できる格好の教育教材であり、中学校武道授業における可能性は大きく広がっております。相撲の授業を全国に広げ、ぜひ中学生を元気にして頂きたいと思います。二日間ありがとうございました」と述べ、無事全日程を終了した。

